未来に残したい
漁業漁村の
歴史文化財産百選

史実・伝承編

「出羽島の漁業史記念物」～阿波沚（あわはえ）発見者功績の碑～　徳島県牟岐町

阿波沚（あわはえ）発見者功績の碑

出羽島の漁業は、寛政 12 年（1800）に、鞆浦御陣屋の漁業開発を目的とした移住政策に端を発し、大正・昭和初期の最盛期には、徳島県下の大型カツオ・マグロ延縄漁船全 13 隻のうち、4 隻が出羽島に在籍しており、牟岐の一地域としての出羽島という認識ではなく、「阿波の出羽島」として漁業界に名を馳せた。このような出羽島漁業隆盛の要因となったのが、大正 3 年（1914）11 月に、山村雪太郎氏所有の大正丸によって発見された阿波沚なのである。そして、この阿波沚の発見により、出羽島の漁業は、それまでの沿岸漁業中心から、遠洋漁業中心の構造に移行していくことになる。

出羽島では、その年の夏以来の不漁続きで、漁師は、その日の米代にも困る状況にあった大正 3 年（1914）11 月 19 日、出羽島山村組の大正丸（24 ㌧）は、島民の最後の頼みの綱としての期待を背負いつつ、四国沖を南に航行していた。父雪太郎に代わって舵を握っていた山村源太郎は 25 歳の血気盛りで、25 名の乗組員と共に、のるかそるかの気持ちで漁場を求めてさまよっていた。そして、大正丸は偶然シビの大群に遭遇し、大漁旗をかかげて出羽島に意気揚々と帰港することになる。

その後、その漁場での大漁が続き、本物の好漁場であることが確認されると、当時の出羽島漁業組合長であった雪太郎は、私すべきでないと考え、県の水産試験場に連絡する。県は、翌年 1 月に早速その漁場周辺調査を実施、その結果、室戸岬から南 40 余海里の地点に漁沚を発見したのである。そして、その漁沚を、「阿波沚」（現在の土佐碆）と命名した。

しかし、漁民たちは、発見した大正丸の功績をたたえて、「大正沚」と呼びならわしているという。この好漁場には、その後広く、高知、和歌山、三重、静岡の各県から漁船が続々とつめかけ、今日に至るまで、わが国における鰹一本釣りの好漁場となっている。

昭和 8 年、出羽島の人びとや徳島県遠洋出漁団組合は、山本雪太郎の功績をたたえ、感謝の心をこめて、出羽島漁港口の正面に「山村雪太郎君業績の碑」を建設したのである。

山村雪太郎君之碑

山村雪太郎君ハ海部郡牟岐町出羽島ノ人明治元年ヲ以て生ル。考ヲ直七トイフ。君ハ其長子、幼ニシテ漁撈ニ従ヒ常ニ精励事ニ当ル。三十九年出羽島漁業会監事、四十二年組合長ニ挙ゲラレ日夜淬励克ク衆ノ期待ニ副ヘリ。大正三年阿波沚ヲ発見シテ近県漁業者ニ与エシ裨益尠カラズ。昭和三年徳島県遠洋漁業出漁団組合長トナルヤ、常ニ時代ノ要望ニ対応処シ以テ之ガ振作ニ寄与セラレタル功績洵ニ多大ナリ。又夙ニ余力ヲ地方自治ノ進展ニ致シ推サレテ町会議員トナルコト茲ニ十有二年ニ垂トス。故ヲ以テ、一々表彰ノ栄誉ヲ受ケ、信望益々加ハル。豈偶然ナランヤ。頃者組合員並ニ有志等胥謀リ碑ヲ建テ其徳ヲ不一ニ伝ヘント欲シ其行実ヲ畧叙シテ之ヲ世ニ示スト云爾

昭和八年建之

発企者　出羽島漁業組合
　　徳島県遠洋出漁団組合

碑文

みどころ

- **蛇の枕：出羽島の大池に大蛇がすんでいて、胴の大きさはモッソ（木製の丸い弁当箱）より太かった。時々池から這い出し大きな石を枕にした格好で眠っていたそうな。その姿は、沖合いからもたびたび見たという。その丸い石は今でも残っている。**